

<10月20日>
報告

故地参観をともにして

中国人強制連行を考える会 川見 一仁

2012年10月20日(土)広島、午前10時から「安野 中国人受難之碑」前で挙行された「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」と、午後の法要と受難現地巡りに参加した。主催は西松安野友好基金運営委員会。

午前8時に平和記念公園そばの宿舎を出発したバス2台は9時前には高速道を降り国道191号線にぶつかる。右折すれば日本第2位の堰堤高さを誇る温井ダム方面、左折およそ5分で坪野に至る。善福寺の休憩時間に初めて訪日団一行18名に接した第一印象は「若い」、今迄4次の団にくらべおよそ半分の人数なので「顔が見える」そして「女性が多い」(コミックの「NARUTO-ナルト」の愛読者がいたのにはびっくりした)。

受難者を追悼し平和と友好を祈る

10時から始まった集いの司会は岡原さん、通訳は揚小平さん。司式の冒頭、碑の各寸法が強制連行された360人、亡くなった29名にちなむことを紹介する。

主催者挨拶は基金運営委員長の内田弁護士、中国人受難者・遺族代表の曲啓傑さん、西松建設代理人の高野弁護士(代読)の3名。西松建設の挨拶によれば、台湾にも調査の手を助け生存者と面談しているとのこと、和解を求める基金の執念に驚く。

引き続き来賓挨拶は安芸太田町長を代理し栗栖副町長、中国駐大阪総領事館より王磊領事、善福寺の藤井住職、広島県教職員組合石岡委員長の皆さん。

二胡演奏「海はふるさと」が流れるなか献花が始まり、冷涼とした大気に包まれ来賓の献花に移る。地元の方がお花を供える。原告勝訴判決を下した鈴木元広島高裁裁判長が参加されている。鈴木さんは原告であった曲啓傑さんらと碑の前でカメラに収まった。広島高裁判決があればこそ、最高裁の4.27判決が導かれたのだ。この姿を新美弁護士、福田さんに見てほしかった。碑を前にして故人を偲ぶ時間の長さに参加人数の多寡は関係ない。

坪野の工事現場

記念撮影を終え、石段作りの山道を辿って放水導管の上部に登る。川原さんが当時の写真をかざしながら現在の川や道路などと引き合わせて説明する。手すりから身を乗り出すようにして「受難現地の景色」を見つめる坪野第1中隊の遺族たち。日本側の証言記録が紹介される、「建物、貯水池、放水路を作った。竪穴放



水路を上下から掘削し最後に贯通させるところが難しく中国人1名が生き埋めになった。よく働く奴だったので助けることにした・・・」「雪の日は事前に1時間くらい雪かきをさせた」。第1中隊の于振坤さんの証言が紹介される、「ウインチに挟まれ多数の指を切断したため仕事ができないことをどう償ってくれるのか!」。同じく尹広祥さんと臧述寛さんの遺族も今回訪日しており証言が紹介される。臧さんは原爆で亡くなった、孫の臧玉明さんの出身は南京とある・・・1937年から1945年へなんという被害の連続。

善福寺で追悼法要

碑前に戻りバスで善福寺へ移動、お寺の本堂で昼食を頂く。食後の短い休憩の間、バス通りを挟んでお寺の前を流れる太田川のほとりに立つ一人の遺族の姿が印象的だった。追悼法要に先立って、亡くなった29名の死のありようが報告される。3名が船中で亡くなり遺体は海へ捨てられ遺骨はない。5名が原爆で死亡し遺骨はない。21名の遺骨は残っていた。1958年に

遺骨送還運動が取り組まれ、26名の遺骨を祖国へ送り届けた。原爆死した5名の遺骨は平和記念公園の原爆供養塔から分骨した。善福寺では1958年まで5名の遺骨を預かっていた。加計町の火葬場に残されていた遺骨も発見され祖国へ帰った。訪日団18名中4人が日本で亡くなった人の親族だ。読経が始まる。読経にあわせ中国から持参したお線香を供える。この日は訪日団だけでなく日本側参加者も全員が焼香した。傅子忠さんの遺族である傅新恵さんが「自分の叔父もこの地で亡くなった。ここであったことは戻ったら家族に伝える」と遺族を代表して挨拶。

その後、安野の歴史を広く知ってもらうために作られた安野現地案内図が一人一人に配られ、地図をもとにこれから尋ねる収容所ごとの人数や作業の様子が説明される。11人の日本人が広島地裁に陳述書を提出したことが高裁での勝訴の大きな要因となったことが紹介される。

それから谷キヨコさんが証言、「トロッコの待ち時間にこっそり庭に入ってくる中国人に、母親は（兵隊で台湾にいるわが子＝谷さんの弟も同じように苦しんでいるかもしれないと思って）食べなさいやと芋をあげていたことを思い出す」と。ここにも中国の詩人・陳輝が「とおい海をへだてた故郷の寒村で・・・いっしんにはるかな戦地の息子の無事を祈っているにちがいない・・・」と詩にうたった老いた母がいたのだ。于桂美さんが挨拶、「自分の父は第1中隊だった、谷おばあちゃんから水をもらい芋を食べたかもしれない」。

住職ご夫妻と訪日団との記念撮影を終え善福寺を辞去したのは2時半を回っていた。

津浪収容所跡

第3中隊があった津浪へはバスでわずか5分あまり。かわいらしい「道の駅」の駐車場で自宅隣に津浪収容所があった岡田さんの証言が紹介される。「靴は破れセメント袋を足に巻き縄で縛っていた。1944年の秋から泣き声や怒鳴り声が絶えなくなった」。中国人生存者の証言が紹介される。碑の除幕式に参列した楊希桂さん、「日本人の見張りは夜になると外から門をかけて帰った。大声で話すのはいいがヒソヒソ話をすると怒られた。冬は雪が多く足が滑りトロッコの車輪に足指を潰された。セメント袋は洗うと柔らかになり、服にした

り寝るとき掛けたりした。おなかがいっぱいにならない、着るものがない、家に帰りたい、という三つが辛かった」。集落の中を収容所跡地の田んぼ脇へ歩いて行



く。跡地を見ながら訪日団から質問が飛ぶ。「岡田さんの家は当時のままか?」「収容所はどのくらいの広さだったのか」。前回まで訪日団に証言してくれていた日本発送電の技師であった尾坂秋三さんは高齢のためおいで頂けないそうだ。

香草収容所跡

香草に3時半過ぎ到着。秋田県大館市主催の「花岡事件6.30慰霊祭」に参加したあと足を痛め、ずっと入院が続いている栗栖さんが証言に立つ。この日のためにわざわざ病院の外出許可を取ってきたのだ。香草という地名のいわれはお茶の産地だったことによる、この神社前から直線で300mのところ自宅があり、収容所で働く父のもとへよく来ていたので中国人の様子を間近に見ていた1929年生まれの栗栖さんのお話が始まる。

「・・・林の中を向こうの山際まで間口3間、長さはここから鳥居手前まで。建物は板の間にむしろ敷き。石炭を燃料にしていたなんて嘘、昼間自分で薪をとっていた。朝6時から夜6時までの2交代。ここから400m位のところに現場があり、トンネル掘りの仕事。朝鮮人がダイナマイトを仕掛け、中国人が発破後の大小の尖った碎石を運び出す。慣れないトロッコの運転でカーブを回り切れずよく脱線した。トンネルの中は天井からの水滴と水たまり、収容所に戻ると濡れた服のまま朝まで寝転んでいた。食事は高粱とメリケン粉。1945年初頭からはドングリ粉、地元の小学生が集めたドングリを絞って機械用油をとり、残った搾りかすを

中国人に食べさせた。衣食住、そして労働・・・牛馬以上に働かされてあつという間に身体が悪くなる。法廷で陳述したときに『このことは中国で孫にまで伝えられるだろう』といったが、聞くとお爺さんやお父さんたちはあまり安野でのことを話していないようだ。日本でのつらい生活を話したくなかったのだなと思った。逆に皆さんがどれだけ話を聞いているかを聞かせてほしい・・・」。

松葉つえを突きながら、ドングリを示し、自分で描いた現場の様子を絵を拡げて話す栗栖さんに椅子が勧められ訪日団の二人が座るのを助ける、それでも話が激すると目の高さを訪日団の第2中隊の遺族と同じにして話そうと栗栖さんは立ち上がり、松葉つえが腕から外れ落ち、涙声になり、また椅子を勧められる・・・。

訪日団は押し包むように、栗栖さんの話に集中し親族の生の経過を知ろうとする。終焉の地を尋ねて日本人から肉親の最期を聞き思いを馳せる。中国人受難の地に住み続ける日本人が、中国人の生死をないがしろにしてきたわけではなく心に刻み続けてきたことを知る・・・。これは西松和解がなつてはじめて成立した関係だ。これこそが原告をはじめとする联谊会が切り開いた「全体解決の具体的なかたち」だと強く思った。



中国人の証言がここでも紹介される。王星彬さんが74歳の時の証言、「最も苦痛だったことは、食事と衣類のこと。そして家に帰れないこと」。孫の劉殿芝さんは「2交代で16時間働かされた。病気になつても室内で働かされた」という祖父から聞いた話を紹介した。鞠万三さん78歳の時の証言、「高粱と大豆の飯。日本では何一つ支給されず、一度も入浴していない。住んでいたのは木に板を打ち付けただけの小屋だ」。おじい

さんから何か聞いたことはあるか?との問いに「何もない・・・」と応える鞠金虎さん。

周茂聚さん(船中で死亡)のことを宋継堯さんが覚えていた。船中では容器がさびびて飲料水が赤水となつてしまい、飲むことができず病気になつて水を求めながら死んでいった。死者は藁に包み鉱石をつけて海に捨てた。甥の周孔英さんが「おばあさんが大金をはたいておじいさんの行く方を探し、日本へ連れて行かれたらしいと分かつた」と強制連行された後の家族の様子を証言した。最後に栗栖さんを囲み穏やかな雰囲気の写真撮影。

土居取水口

4時40分に土居の駐車スペースに到着。いつもとは逆方向へ歩いて行くので訝ると、今回初めて土居の収容所跡を見るのだという。なんと駐車した土地の隣なのだ。そこから徒歩およそ10分の土居取水場まで、訪日団のメンバーがごく自然にハンドマイクを預かつて歩く姿に言い知れぬ親近感を覚える。「お客様」じゃない、受難現地を訪ねる辛い歩みを共にし歴史を前へ進めようと願う仲間同士、これが和解のプロセスなのだ。土居の第4中隊の訪日団は二人。陳立邦さんの脱走証言が紹介される。孫のお嫁さんである段節欣さんが訪日団に参加している、「何か話を聞いたことはあるか?」との問いに、「聞いたことはないが、今回訪日して日本での大変さが良く分かつた。必ず後代に伝えたい」と挨拶がもどってくる。

尹玉彬さん(21歳)から質問が出る「今日日本の若者がどう考えているのか?」。岡原さんが教える側の経験から応える。5時15分夕空は十分に暗さを増した。収容所めぐりの日程終了を伝えるが、文玉林さん(38歳)の質問が続く「日本の戦争のことを日本の子供たちは知っているのか?」。教員である崔博憲さんの応答に続き、内田さんが応える、「自分の娘が小学校4年生の時に劉連仁さんが息子と再会している写真が教科書に掲載された・・・」と。

施設開放にずっと立ち会つてくれた中国電力担当者に一日の労を謝し、土居の駐車スペースへ向かう道すがらドングリを拾う姿を幾人も見かけた。5時40分過ぎに土居を発つ。夕食は7時を過ぎるだろう。中土さんが「月がきれいだ」と中天の半月を指さした。